

・結婚には、プロ意識が必要。

腰かけ的なOLは、運よく巡り合った男性との結婚にゴール・インする。それも、プロ意識を持たずに、自信もないまま、ただ、甘い幻想に浸り、「きっと、この人なら私を幸せにしてくれる」といった、結婚の幸せを他人まかせの姿勢で歩み始める。

こういうプロ意識を欠き、しかるべき準備を怠り、他人まかせで結婚するのは女性だけではない。男性にも多いのである。そういう者同士が結ばれた結婚がどういうものになるかは想像に難くない。

・結婚継続には適性がある。

結婚に向く人と向かない人がいると私は思う。向く人はおそらく誰とでもうまくいくし、向かない人は誰とでもうまくいかないのかもしれない。

アメリカでの私のマリッジ・カウンセリングの臨床で、一度離婚した人が再婚し、また離婚したというケースに多く出逢った。何度も結婚し、何度も離婚するというケースは珍しくない。事実、再婚者の八割が離婚しているというデータもある。

結婚には適性があり、結婚するには適性を備えておかないと、結婚生活に適応できずに、挫折する可能性が高いというのが私の持論である。少なくとも結婚生活の質と内容が、個人の適性によって大きく左右されることはまちがいない。

・結婚前に、結婚観や価値観が整理されていない。

こういう結婚生活をしたいとか、こういう夫であって欲しい、こういう妻になりたいといった結婚生活に寄せるさまざまな期待は、すべてその人の結婚観（結婚生活はどうあるべきだといった個人的意見）から発生するものなのである。

とするならば、こういった個人が持っている結婚観を、結婚を望む男女が理解し合うを話し合い、理解し合うことなく結婚にゴール・インする男女が意外にも多いのである。そして、結婚生活を始めた後で、結婚観や価値観のちがいによるさまざまな問題に悩まされるという夫婦が少なくない。そういう妻や夫たちが、私の臨床の場に多く登場する。

なぜ、そういう大事な話し合いが結婚前になされないのだろうか。それは、一つには自分自身の中で、結婚観や価値観がよく整理されていないからだと思う。

・見切りをつけられる夫、妻

ややきつい表現だが、世には、まさに泥棒に変身した夫たちが多くいる。いや、夫の面を被った泥棒と言うべきかもしれない。こういう、一方的に妻からのサービスを求め、自立を忘れた未成熟な夫に見切りをつけ、奪われつづけた自分の行為に気づき、離婚する妻たちが最近ふえているのではないか。

一方的に与えつづける理不尽に気づき、関係に終止符を打つのは妻だけではない。精魂疲れ果てるまで働き、経済的に妻に貢ぎつづける夫に甘え、ただ経済的に安住するだけで、夫に心の安らぎや慰めを与えることを忘れた妻に見切りをつける夫たちも少なくない。

・共に悲しめる、共に笑える

流産した後の体の状態が悪く、しばらく病床についていたある夫人は、その期間、夫から一言もやさしい言葉、慰めの言葉を聞くことがなかったことに深く傷つき、離婚を決意したと言う。心の痛みを分かち合えない者と、生涯、伴侶として歩みつづけることはできないと悟ったと言うのである。

共に悲しむことができる夫婦こそ、共に笑う夫婦になれるのだと思う。また、共に笑うことができる夫婦は、共に悲しむこともできるのではないだろうか。